

カースト制度と職業

——不可触民タッパ奏者の事例から——

Caste System and Hereditary Occupation: A Study on the Occupation of *Thappu* Players from Untouchable Caste

アントニー, スサイラジ・古澤夏子¹⁾

Antony SUSAIRAJ and Natsuko FURUSAWA

要 約

カースト制度とそれに結びついた世襲的職業は、時代を経て変化してきた。特にイギリスがインドを植民地支配する際に、イギリスはカースト制度を利用して、上位カーストに政府の仕事を割り当て、カーストを固定化した。そうした中、低カーストは不浄とされる労働を担ってきた。現在では低カーストに対して優遇措置があり彼らの仕事の幅が広がったが、特に地方では未だに世襲的職業に従事している人たちがいる。タミルナードゥ州ヴァディパッティ町には不可触民パライヤルの世襲的職業である太鼓叩きとトータティーがある。この二つの仕事は本来は葬儀の場で太鼓を叩き、葬儀の下働きをし、ジャジマニ制度のもと報酬が現物支給されていた。しかし、現在ではそうした伝統的仕事の担い手や報酬の形態が変化している。その一方で、ジャジマニ制度の名残とも思われる慣習も存続しているのである。

【序】

インド社会では太古の時代から世襲的職業が行われていた。しかし、カースト制度や世襲的職業の起源やダイナミズムをどのように説明するかという点についてインド・カースト制度の研究者の間で意見の一致は見られない。現在、カーストに基づいた仕事を義務づける規則は存在しない。にもかかわらず、実際には様々なカーストに属する多くの人々が世襲的職業に従事している。とりわけ地方農村部でそれは顕著である。ルイ・デュモン¹⁾の報告によると、世襲的職業は減少しつつあるが、ある種の職業については依然としてかなりの安定性をもって存続している。その多くは地方農村部において顕著で、しばしば宗教的色彩が強い。清掃カーストの76パーセント、金銀細工カーストの75パーセント、菓子製造業カースト・穀物乾燥業カーストの60パーセント、理髪業カースト・クリーニング業カーストの60パーセント、大工・職工・壺製作カーストの50パーセントが自分たちの伝統的職業に従事している [Dumont 1980: 96]。カーストに基づく職業については、歴史・

1) 南山大学人間文化研究科人類学専攻博士前期課程 2014年修了

宗教・社会・経済・植民地主義の問題など、様々な視点から解釈することができる。本論文では次の二つの点に焦点をあわせたい。第一の論点はインド社会システムの歴史を概観し、カーストおよび世襲的職業がどのような側面をもち、そして変化していったかという点である。そして第二の論点として、不可触民の置かれた伝統的状況と不可触民のサブカーストの一つパライヤルの世襲的職業である太鼓叩きとトーチターをとりあげたい。

第一章 カースト制度と世襲的職業

【カーストおよび世襲的職業の諸相と変遷】

カースト制度の定義・描写は様々である。ヴェラッセリの定義によればカーストとは、ある民族集団内部の内婚制的世襲的下位区分集団であるが、それぞれの集団は他の同様の下位区分集団と比較して社会的評価において上位のあるいは劣位の位置を占めているとされる [Vellassery 2005: 2]。ところで、人物の社会的ステイタスは従事する職業の種類によって決定される。歴史的にはカーストシステムは紀元前 1500 年頃インドにアーリア人がやってきたことから始まったと考えられている。アーリア人がインドにやってきた際、主たる遭遇相手は先住民ドラヴィダ人であった。ドラヴィダ人にとっては不幸なことに、アーリア人は現地の文化を完全に無視し、北インド全体を征服し、先住民を圧迫して南におしやってしまった。アーリア人はヴァルナ²⁾と呼ばれる特有の社会秩序の原理をもっていた。それは社会の機能の四つの階層的区分に基づいていた。その四つの階層はそれぞれ特有の義務と機能をもっている。スミスはこの四つの社会集団の機能を次のように分類している。すなわち、ブラーミンは宗教関係・司祭職に従事し、クシャトリアは防衛・政治的支配、ヴァイシャは農業・交易、そしてシュードラは隷属的業務に従事する [Smith 1944: 9]。カースト制度においてシュードラは労務者・小作人・職人・使用人の役割を担い、階層的に低い地位に置かれた存在と見なされている。彼らは死んだ動物の回収など、その皮を剥ぐといった不浄で汚れていると考えられている仕事を行うために、彼ら自身汚れており、従ってアウト・カーストな存在であると定義されている。この四つのヴァルナはそれぞれさらに多数のサブ・カースト、すなわち Jati に分かれている。ブリタニカ百科事典は Jati (jat という綴りが用いられることもある) をヒンドゥー社会におけるカーストであると定義している。この単語はサンスクリット語の jāta (「生まれ」または「生み出された」という意味) から派生した単語で、生まれによって規定されたある種の存在のあり方を指示している。哲学的には Jati (種類) は、類として共通する特徴を持ったグループ一般を指す単語である。社会学的には jati という単語は一般的にヒンドゥーにおけるカースト・グループを指示するために用いられるようになった。インド社会の歴史において、同じ仕事をもつ人々は同じアイデンティティー、類縁性をもったグループとなった。セクホンは、各 Jati は特定の仕事で生計をたてるグループで構成されていると述べている [Sekhon 2000: 40-41]。カースト社会において、人は誕生すると同時にあるカーストの一員となり、その結果、それに適した職業を獲得することになるのである。

2) 「ヴァルナ」はヒンドゥーの聖典によると、質に基づく人間の分類である。この単語はサンスクリットの単語 vr (「描写する」、「分類する」、「カバーする」を意味する) からきたものである。ヴァルナは四つのタイプに分類される：ブラーミン、クシャトリア、ヴァイシャ、シュードラである。

【宗教的理由】

カースト制度は人為的に作られた社会的階層である。しかし高カーストであるブラーミンがこれに宗教的色彩を加えたことにより社会的に正当化され、低カーストの人々も反対したり反抗したりすることなしにカースト制度に同意するようになった。カースト制度は古代インドにおいて様々な根拠に基づいて合理化された。ヴェーダに書かれている次の神話はそうした正当化の一つである。リグヴェーダ第10章ではプルシャ・スークタは神々によって行われた大供儀時代に宇宙的魂であるプルシャの身体の様々な部分からどのように各カーストが生まれたかを描いている。すなわちブラーミンはプルシャの口から生まれ、クシャトリアは両腕から、ヴァイシャは両腿から、そしてシュードラはその両足から生まれた。ダルマ・シャーストラ³⁾にはカースト制度が理論的に言明されているが、これはヴェーダの階層的カースト・システムの社会的教義をさらに正当化する結果となった [ibid: 28]。そこには解放 (moksha) を成し遂げるためには、主たる義務として世襲の仕事を継続することが重要であると強調されている。スミスはカルマ説がカースト制度正当化のもう一つの手段になっていると述べる。カルマ説によれば、過去に自分が行った行為の結果が現在の状況を決定している [Smith 1994: 10]。「輪廻」という考え方はカースト制度の中で世襲的職業を継続することに対する人々の反発を予防するのに大きな役割をはたしている。「輪廻」は、先住民に対する自分たちの抑圧的行動を正当化し、民衆が制度に対抗して蜂起することを妨げるためにアーリア人によって作りあげられたのである。「輪廻」は二つの方法でカースト的抑圧を正当化する。高カーストの人々にとって、それは低カーストに対する自分たちの特権と支配を正当化する。一方、低カーストの人たちにとっては、それは前世の悪いカルマ (業) の結果として抑圧されている現状を受け入れ、低カーストに生まれたことから生じる困難を自業自得として受け入れる理由となる。こうした考え方はカースト・システムにおける世襲的職業を合理化するものである。ヒンドゥーのダルマは低カーストの人々に、来世で地位を改善する方法は現世で与えられた仕事を誠実に反抗することなく行うことであると説く。ヒンドゥーにとって、ダルマとは宇宙の道徳的秩序と生活の規則であり、そしてそれはすべての現実を支配する法・宗教・義務の根本的原理を体現しているのである。ヒンドゥー的世界観では、人は自分のダルマに従うことによって、死と再生 (samsara) のサイクルからの解放を実現することができるとされている。伝統的ヒンドゥーの見解では、それぞれの人間の義務は年齢、性別、職業、カーストによって規定される。ダルマは、少なくとも部分的には、規定された儀式やカーストの義務といった用語によって理解されている。世襲的職業はこのような宗教的解釈によって正当化されているのである。

【経済的理由】

ジャジマニとして知られる世襲的職業のシステムはインド農村部で広く実践された経済的仕組みで、イギリス人到来の後も生き残った。ルイ・デュモンによれば、このシステムに組み込まれていた人々はジャジマニという言葉を必ずしも用いたわけではなく、さらにはそうした言葉をまったく知らない場合もあった。ジャジマニという言葉は「犠牲をする者」という意味のサンスクリット語の Yajamana という言葉からきている。語源的にはジャジマニという単語は生贄の司祭としてブラーミンを雇う家長を意味する。ヒンディー語の辞書ではジャジマンという語があり、報酬を与えてブ

3) ダルマ・シャーストラとはサンスクリット語で書かれた神学書で、ヒンドゥーの生活様式に関する一連の注釈書を指し示す言葉である。

ラーミンに宗教的儀式を行ってもらう人という定義が与えられている。ゴフはジャジマニ制度を「同じ地域に住む異なったカーストに属する二つまたはそれ以上の数の特定の家族間に存在する封建的システムで、報酬そして業務・儀礼にかかわる作業の世襲的義務を規定するもの」と定義している [Gough 1960: 83-91]。ジャジマニ制度のもとでは、村落は基本的に食料自給の単位であり、そこで手工業・労務提供カーストは一つないしは複数の自作農カースト家族とリンクされていた。デュモンによれば、ジャジマニ制度の背後にはいくつかの原理が存在する。第一にそれは世襲的人的関係を利用して、労働分業を実現する。つまり各家族はそれぞれの専門化された業務について、それを専門とする家族を自分用にもっている [Dumont 1980: 98]。ワイザーが調査した村では「出自によって固定された24のカーストが存在した。司祭・教員、詩人・地質学者、会計士、金細工職人、花・野菜生産者、米生産者、大工、金物職人、床屋、水運搬人、羊飼、穀物乾燥業、仕立屋、壺商、油圧搾業者、洗濯人、マット職人、皮職人、掃除人・汚物処理業者、イスラム教徒の乞食、イスラム教徒のガラス製腕輪商、イスラム教徒の綿花梳工、イスラム教徒の踊り子である [Velassery 2005: 2]。各個人はそれぞれの固定された経済的・社会的地位をもっている。上記のカースト区分のリストから次のことがわかる。個人のそれぞれのカーストや従事する職業をとおして獲得される社会的関係は個人に経済的安定性・安全性のネットワークをもたらし、これが村落における生活にとって極めて重要なものとなっている。デュモンによればジャジマニ制度は慣習に合致するような形で用務の給付・反対給付を規定している。「通常の業務に対する対価は現物支給である。対価の支給は個々の用務提供に対して個別に行われるのではなく、年度全体の用務提供に対して行われる。これは農耕社会における永続的関係にとっては自然なことである。少量の食料が毎日提供されることもあるが、それより一般的に見られるのは収穫期における一定量の穀物を受領する権利である。そして最後に、一年間の主要な祝祭の時に提供される義務的な贈り物（時には金銭の場合もある）がある」 [Dumont: 98]。ジャジマニ制度において関係する複数の社会集団の間でパワーバランスが存在するというのではなく、また相互が等しい利益を享受するというものもない。土地を所有するカーストは生存手段と政治権力をコントロールすることで優越的な経済力を享受していた。一方、土地を所有しないカーストは不安定な状況におかれ、自分たちの経済的資源や政治権力の分配のされ方に不満をもっていた。ゴフによれば雇用者 (jajmans) と被雇用者 (kamins) の間の利害対立の結果、カースト間紛争が起こると、村のパンチャヤット (村の審議会) で調停が行われた。しかしパンチャヤットはほとんどが村落の支配的カーストである雇用者 (jajmans) によって構成されていた。その結果、紛争の調停は高カーストが自分たちの支配権を再確認するだけに終わったのである [Gough: 89]。このように伝統的な世襲的職業システムにおいては不平等・不公正がはびこっていた。現代、世襲的職業を継続する人は少なくなりつつある。しかし、伝統的技術・商業に従事する人々は依然として特定の職業を専門的に行うカースト出身者がほとんどである。そして低いステータスの世襲的職業を続けている人々に対する差別は依然として蔓延し続けているのである。

【植民地主義の影響】

本来的にカースト制度は流動性をもっていたのだが、それはイギリス人のインド進出の影響で変化した。イギリスの「分断し統治する」という政策はカースト的アイデンティティーを固定化する結果となった。ナップは、イギリスはインド民衆の諸集団を分断するためにカースト制度の実践を推進したと述べている [Knapp 2016: 24]。1935年、イギリス政府はカースト制度に基づいた地域住民の国勢調査を行なった。彼らは正当で固定的なシステムを記録しているのだと信じたのだが、

そのシステムは大部分がブラーミンの解釈に基づいており、支配グループとしてのブラーミンの立場を追認したに過ぎなかった [Sekhon 2000: 41]。イギリスは政策を実行するにあたって、不浄な仕事を行うカーストは不可触民または指定カーストであるというブラーミン的見解を受け入れた。国勢調査では400のグループが不可触民としてリスト化された。イギリス政府は公共サービスの中の重要な仕事を高カースト出身者に割り当てた。グリエはその例として、ベンガル軍が主にブラーミンやラジプートのような高カーストで構成されているという事実をあげている [Ghurye 2004: 284]。一方、低カースト出身者が上級公務員職に採用されることはなかった。イギリス政府は当時の世襲的職業の現状をそのまま維持したのである。とはいえ、熟練した技能を要する職業、芸術家や仕立屋、靴職人、事務員や家具職人には高い評価がなされるようになった。また、ある時点ではブラーミン出身者でも多くの人が日雇い労働や清掃業・道路清掃を除いたあらゆる仕事に従事したこともあった。さらに、職人カーストに属する多くの人々が教員、小売店主、銀行員、店員、建築家として雇用されもしている [Ghurye 2004: 296]。大都市で大規模な産業が発達すると、そうした都市から地方に大量の工業製品がもち込まれるようになったため、一部のカースト制度と結びついた伝統的手工業は衰退した。このため、多くの織工が農業に転じた。また何世代にも渡って受け継がれてきた職業が新しくできた工場のために廃業に追い込まれることもあった [Bouglé 1971: 81]。このように、インドのイギリス統治の間も、世襲的職業は旧來のとおり維持され続けたのだが、その一方で、いくつかのカーストに基づいた職業が消滅し、新しい時代のニーズに応じた新しい職業が出現し、それが様々なカースト集団によって行われるようになったのである。

【現代インドの世襲的職業】

現代インド、特に1954年から1992年にかけて職業実践に関して重要な変化があった。それ以前には国民の大半が伝統的なカーストに基づく職業—鍛冶屋、皮なめし、壺製造のような仕事—に従事していた。しかし現在では、多くの人々が公務員、教職、小売業、サービス業、機械修理といったカーストとは無関係な新しい種類の職業に就くようになっていく。村落における富や権力も以前ほどはカーストと直結することは少なくなり、土地所有のあり方もより多様化している [Sekhon 2000: 44]。また浄・不浄が低カーストによってもたらされるという考え方もかなり減少した。地方ではカースト特有の職業から脱却して生計手段をうることは依然として困難で、低カーストの間ではその動きは緩慢であるが、都市部では日常生活においてカーストが重要な意味をもつことは今では少なくなっている。セクホンは次のように指摘している。カーストに基づく差別はインドでは法律で禁止されるようになり、カーストは現代インドではむしろ生活手段や権力獲得競争のための一つの手段—教育機会や新しい職業、生存環境改善の一つの道具—となっている [Sekhon 2000: 45]。このように、特定のカーストに特定の職業が割り当てられるという状況に大きな変化が起こったのだが、その最も大きな理由は伝統的職業の消滅、産業の勃興とそれに関連した新しい職業の出現である。ジャジマニ制度と呼ばれる保護者=庇護者関係において、伝統的・商行為を行う特定の職業の労働者は主としてその職業に特化されたカースト出身者が大半であった。こうした制度が産業の勃興とともに崩壊したわけである。インド政府は低カースト出身者を指定カースト (SC)、指定部族 (STs)、後進階級 (OBCs) と規定し、彼らのために優遇措置を制定した。その結果、彼らは政府職員の仕事に容易に就けるようになり、公営企業に就職したり公立教育機関に入学したりすることがより容易になった。しかしながら、こうした恩恵を受けているのは低カースト、下層階級の人々のほんの一部に過ぎない。

以上、ここまでカースト制度一般について述べたが、次章では不可触民の世襲的職業について具体的に見てみよう。

第二章 太鼓の民パライヤル

ヴァディパッティ町は南インドのタミルナードゥ州マドゥレイ県ヴァディパッティ地区に属する人口2万人あまりの地方都市である⁴⁾。ヴァディパッティ地区には二つの Town panchayat⁵⁾があり、そのうちの一つがヴァディパッティ町である。筆者の一人(古澤)はこの町で2011年から2013年、断続的に三度、計4ヶ月弱、南インドの民族楽器タップ(太鼓)についてフィールド調査を行った。ヴァディパッティ町はとりわけタップ演奏が盛んなことで有名である。町以外の地域からの演奏依頼も多く、この町のタップ奏者は海外での演奏経験や映画の出演経験さえある。ヴァディパッティ町には16のドラムセットと呼ばれるグループがある。グループのリーダーはタップの他に大太鼓やマラカスなどの楽器を所有し、必要な時に演奏者を集める。ドラムセットは葬儀や結婚式、通過儀礼、政党の集まりなどに呼ばれタップを演奏することがある。

タップは本来は不可触民であるパライヤルの楽器であり、葬儀の場などでタップを叩くことが彼らの伝統的な世襲的職業であった。しかし、ヴァディパッティ町においては、パライヤルとは別の不可触民であるチャッキリヤルが多数派であり、パライヤルが演奏するタップ奏者は少数しか見られなかった。ドラムセットのリーダーにいたっては、パライヤルは一人もおらずチャッキリヤルのみであった。なぜヴァディパッティ町のタップ奏者はチャッキリヤルが多数派で、本来的な演奏者であるはずのパライヤルが少数なのか—これはヴァディパッティ町で調査を行った時、筆者が真っ先に抱いた疑問であった。調査を行うにつれその疑問はある程度解消されたのだが、この問題を論じるためにはまずインド社会における不可触民の置かれた位置や彼らが強いられた生活の様態について理解することが必要である。そこで本章では、ヴァディパッティ町の事例をまじえながら、不可触民、特にパライヤルの世襲的職業のあり方について記述しよう。

【不可触民とは】

不可触民とは「不浄な存在で触れてはならないもの」という意味であり、インド社会でヴァルナの枠の外に置かれた最下層民である。アーリア人がバラモンを頂点とするカースト制度を作ったのち、最下位のシュードラの下に「不可触民」というアウト・カーストの集団を作り、バラモンが不浄視する労働を押しつけた[山際2014:16]。そして、四ヴァルナに属するカースト・ヒンドゥーにとって彼らと接触することはケガレをもたらすとされ、不可触民は社会生活のすべての面で差別されてきた。

この事実は二つの点で明確に確認することができるだろう。それは居住区と職業である。居住区の差別は村の構造に明確な形で反映されている。現代になって行政区分の変更など様々な理由で状

4) Vadipatti Town Panchayat City Population 2011–2020. <https://www.census2011.co.in/data/town/803745-vadipatti-tamil-nadu.html> (2020年9月20日取得)。

5) 「インドの地方自治機関で通常数カ村を単位とする村落パンチャーヤットを基層とし中間のブロック(郡)、その県にそれぞれ組織される三層の地方政府からなる」[井上2006:579]。

況は変化しているが、ヴァディパッティ町においても不可触民が居住する地域は町の中心を離れたところにあった。ドリエージュによればサンスクリット文献において不可触民は *çandaala* という言葉（「町や村に住む権利がない者」という意味）であらわされている [Deliège 1999: 11]。またベティユは、村の物理的な構造はある程度、村の社会構造の影響があり社会システムにおいて互いに近い人々が近接して住む傾向があると述べている。ベティユが調査を行ったタンジャウル地区にあるスリプラム村は物理的に三つに分けられる。バラモンが居住するアグラハラム、非バラモンが居住するクディアナ通り、不可触民が居住するチェリである [Beteille 1996: 19-38]。カンチプラム地区にあるパッパナッルール村で調査を行ったアルンも同様の報告を行っている。そこでは上位カーストが住む中心部（ウールと呼ばれる）から離れたところにパライヤルの住む地区があり、そして上位カーストがパライヤルを不浄な人であるとして中心部から排除している [Arun 2007: 32-34]。

第二の点は職業である。第一章で述べたとおり、インド社会において四つのヴァルナはさらに多数のサブカースト、すなわち同一の世襲的職業をもつ社会集団ジャティに分かれているが、これは不可触民についても同様である。タミルナードゥ州では指定カーストと呼ばれるグループが76存在するが⁶⁾、その中でパライヤル、パッラル、チャッキリヤルがタミルナードゥ州の中で特に人数が多い集団である。彼らは皮革加工、清掃、洗濯、人間・動物の屍体処理、竹・籐細工、鍛冶職人など「不浄」とされる仕事を強制され、他のカーストと同様、彼らの職業も世襲化されていた [山際 2014: 17; 山崎 2006: 624]。

こういったことが原因となって、不可触民は日常的な差別の対象となっていた。ミスラは不可触民が上位カーストの経営するコーヒーショップで飲食することを許されず、食べ物も他のカーストに給仕することも、給仕されることも許されないなどの規定があったと報告している [Misra 1995: 5]。現在では憲法で不可触民制は廃止されているが、未だに不可触民差別は根強く残っている。ヴァディパッティ町でもパライヤルの男性の妻が病院に行った際、彼女が乗った担架を誰も運ぼうとしなかったという話や、今でも上位カーストと同じテーブルで飲食をともにすることは許されないという証言を得ることができた⁷⁾。

【不可触民——多様性と一体性】

不可触民を指す言葉には、ハリジャン、ダリット、アーディ・ドラヴィダ、指定カーストなど多くある [山崎 2006: 624; 杉本 2008: 143]。

サンスクリット文献には不可触民を指示する *çandala* という表現が出てくる。またヒンディー語には「不可触民」を指すために「触れてはならないもの」を意味するアチュートという言葉も存在した。こうした一方的に否定的なニュアンスの言葉を用いることを嫌い、マハトマ・ガンディーが不可触民を指す言葉として「神の子」を意味するハリジャンという言葉を用いるようになったことはよく知られている。しかし、ガンディーはカースト制を必ずしも差別的な支配秩序と捉えてはいなかった。カースト制を「成員相互の協力関係・分業関係をもとに社会を有機体・統合体たらしめている原理」とみなしたのである [山下・岡光 2007: 56]。このようなガンディーの見方、そして

6) “Scheduled Caste Welfare — List of Scheduled Caste.” <http://socialjustice.nic.in/writereaddata/UploadFile/Scan-0017.jpg> (2020年9月22日取得)。

7) これは男性がヴァディパッティ町以外の場所を訪れた際に経験したものである。

カースト制度そのものの廃止ではなく、ただ不可触民差別の撤廃を目指した彼の政治方針に反発し、ハリジャンと言う名前を拒否する不可触民も少なくない。このようにガンディーの姿勢に反発する人々は自らのことをダリットと呼ぶようになっていった [大橋 2001 : 20]。

ダリットという語は、マハーラーシュトラ州のマラーティ語で「抑圧された」という意味をもつ [杉本 2008 : 144]。マハーラーシュトラ州のデカン高原を中心に、マディヤ・プラデーシ州の南部にも多数居住している不可触民マハールは、アンベトカルを指導者に 1920 年代から解放運動を開始し、インド独立後は差別からの解放と権利の拡大、強化を求めて、激しい政治運動を繰り広げた。マハールを中心とする政治運動組織の内でも最も有力な団体は、当時アメリカで黒人民族主義運動や黒人解放闘争を展開した政治組織である「ブラック・パンサー」に倣って、「ダリット・パンサー」を名乗った。こうしてマハールを中心とする政治運動は一般に「ダリット運動」と呼ばれた。彼らは「不可触民」や「ハリジャン」といった名称を拒否し、自らを「ダリット」と呼んだ [小谷 1994 : 382 ; Shah 2001 : 196]。ダリットという言葉は不可触民を排除するインド社会に対して抗議を表明するという明確な政治意識の反映であると言える。

アーディ・ドラヴィダは「ドラヴィダの国に最初に住んだ人」という意味である [杉本 2008 : 144 ; Delière 1997 : 124]。この名称は南インドタミルナドゥ州の不可触民一般を指して使われる場合と、固有のカーストの名称として使われる場合がある [杉本 2008 : 143]。アーディ・ドラヴィダという名称は 20 世紀に入ってから作られた言葉である。上層カーストを構成するアーリア人に対抗して自分たちを一つの民族（先住民族）を構成するものとして主張するこの名称は民族主義的意識から生まれた言葉であると言える。この名称はパライヤルによって使用され、チャッキリヤルの中にもこの名称を使用する者も現れた [杉本 2008 : 149]。

このように不可触民を指す語は多様であるが、それらの語が不可触民と結びつけられる背景には以上のように様々な要因があった。しかし、そもそも不可触民というカテゴリーが強化されたのはイギリスによる植民地支配がきっかけであったとも言える。第一章で述べたとおり、イギリスはブラマンの見解を受け入れ、高カーストに公共サービスの重要な仕事を任せる一方、低カーストには世襲的職業を継続させた。こうしたイギリスの政策がもともと漠然とした形で存在していたカースト制度に明確な輪郭を与え、固定化してしまったという側面は否定できない。不可触民についても同様の指摘が可能である。西洋の眼差しが「不可触民」を一つの明確なカテゴリーとして実体化してしまうという効果をもっていたのだ。さらに、現在、インド政府は底辺層の生活環境改善のために、不可触民を指定カーストに分類し、彼らを対象にして優遇政策を行っている。これが社会改革のために必要な施策であり、ある程度の成果をあげたことは言うまでもない。しかしこうした施策の存在がカースト制度、ひいては不可触民の存在を実際以上に固定化し、そのあり方に大きな影響を与えたという側面も看過してはならないだろう。

そもそもインド社会では一般的にはヴァルナを、我々が想像するほどは、重視していなかったようである。日本にきたインド人が日本人にカーストを聞かれたことで初めてヴァルナに基づく自分の四姓カーストを意識したという発言もある。インド社会では自分の属する社会集団として重要視されるのはヴァルナよりもジャティ (Jati) という単位である。というもどのジャティに属しているかによって世襲的職業が決定され、社会的行動が規定されるからである。従って、インド社会を正確に分析するためには不可触民を一つの統一されたカテゴリーとして見るだけでは不十分である。しかし不可触民に限定しても、インド全国ではジャティの種類は膨大な数にのぼる。ここではヴァディパッティ町の不可触民についていくつか代表的なジャティを紹介し、そしてその中のパラ

イヤルの伝統的な世襲的職業の一部についてやや詳しく論じることにしよう。

【ヴァディパッティ町の不可触民の主なサブカースト】

ヴァディパッティ町の主な不可触民はパライヤル、パッラル、チャッキリヤルである。ヴァディパッティ町における不可触民ジャティのそれぞれの人口数を確認することはできなかったが、2001年の国勢調査であげられているタミルナードゥ州の10万人を超える主たる五つの指定カーストはアディ・ドラヴィダ(540万)、パッラル(227万)、パライヤル(186万)、チャッキリヤル(77万)、アルンダディヤル(77万)である⁸⁾。このうちアルンダディヤルは後で述べるように、チャッキリヤルの別称である。また、アディ・ドラヴィダはチャッキリヤルも含まれるがその多くがパライヤルであると考えられる。従って、タミルナードゥ州の不可触民の中でパライヤルが最も大きな集団であると考えられる。第一章で述べたとおりこれらのサブカースト(ジャティ)はそれぞれ特定の職能(世襲的職業)をもち、伝統的なジャジマニ体制の中で拘束的な身分関係をもっていた。下位カーストは上位カーストに特定のサービスを行い、上位カーストはそれに対して穀物などの現物支給という形で一定の報酬を与えていた。ジャジマニ制度の中での世襲的職業をトリル(thozhil)という。

ヴァディパッティの三つの不可触民ジャティのうち、まずパッラルは農業労働者であり、上位カースト(ヴェッラーラ)の土地を耕作していたが、実質的には農奴という位置づけだった。パッラルはパライヤルと長い間ライバル関係にあったといわれ、互いにお互いよりも上位であると主張していた[Thurston: Vol. V. 472-486]。

一方、チャッキリヤルはタミルナードゥ州の不可触民の中で三番目に多いカーストである。チャッキリヤルという名称はサンスクリット語の肉食者を意味するシャトクリ(Shatkuli)からきている。彼らは牛や豚の肉を食べ、さらに飲酒をする。また、彼らはチャッキリヤルの他にアルンダディヤル(Arunthathiyar)という名を名乗ることもある。これはチャッキリヤルという名称がネガティブなニュアンスをもつためである[Thurston 1909: Vol. II, 2]。チャッキリヤルのトリルは皮革業であった[デュボア 1988: 113]。チャッキリヤルが行うサービスは農業生産に欠かせない井戸や灌漑設備に使用する革袋を作りウールに提供することだった[関根 1995: 81; Moffatt 1979: 140-141]。

最後にパライヤルであるが、これはタミルナードゥ州の不可触民の中で最も大きなグループである。またタミルナードゥ州だけではなくインド全般において、不可触民の代表的なカーストとみなされてきた[Arun 2007: 35]。特に、パリ外国宣教会の宣教師であったデュボワ神父によるインド・カースト論の古典『カーストの民—ヒンドゥーの儀礼』で紹介されたことで、世界にその存在が広く知られるようになった。パライヤルという言葉はタップの別名であるパライからきた「パライを叩く者」という意味である。パライヤルのトリルと通常よくあげられるのは太鼓叩き(kottuadital: コットゥアディタル)、死獣処理(thotti: トーッティー)、屍体の火葬(vettiyan: ヴェッティヤーン)、村の見張り番(kambukutti: カンブクッティ)などであり、これらの仕事はウールに住む上位カーストに対して行われるサービスである[Arun 2007: 32; 関根 1995: 79]。パライヤルは上位カーストに対してこうしたサービスを行い、報酬を得ていた。一方、デュボワ神父は彼の著書の中でパ

8) https://web.archive.org/web/20100401022349/http://censusindia.gov.in/Tables_Published/SCST/SCCRC_33.pdf (2020年9月29日取得)。

ライヤルの人々は上位カーストである農民カーストの人々に生涯束縛され最も過酷な労働を強制されると述べている [デュボア 1988 : 73]。先ほど述べたパッラル同様、不可触民ジャティの多くが農業奴隷として労働を強制されていたが、太鼓叩きや死にかかわる職能（死獣処理や葬儀など）はパライヤルの特徴的なトリルだった。

【パライヤルの世襲的職業】

アルンはパライヤルのトリルの一つとして死獣処理トーツティーをあげているが、ヴァディパッティ町では一般的に葬儀に関する仕事ないしはそれに従事している人をトーツティーと呼ぶ。関根はトーツティーを「パライヤルによって持ち回りで分担される下級の村役」とし、その主な業務として墓掘、死獣の処理、葬式下働き、メッセンジャーをあげている [関根 1995 : 79]。

担当する地域の人が亡くなると、トーツティーは仕事を補佐してくれる人を集め、死者の家に行く。そして、遺体の口が開かないように頭部を紐で縛ったり、死者を墓場まで運ぶ際にポリと呼ばれるポン菓子のようなものを蒔いたりする。また、火葬の場合は薪と牛糞を用意し遺体と共に焼く。トーツティーは遺体を焼き終わるまで墓場に残らなければいけない。遺体が灰になるとトーツティーがそれを拾い遺族に渡す役割がある。報酬は二つあり、まず全体の報酬として700ルピー支払われる。これはトーツティーと補佐した人で分配される。遺体が焼き終わった後、さらにおよそ100ルピーから200ルピーほどの支払いがある。これはトーツティーのみが受けとることのできる報酬である。

ヴァディパッティ町には女性のトーツティーが存在した。彼女の役割は壺の準備やポリを家から運ぶ役割やドラムセットに演奏を依頼することなどである。そして、彼女は葬儀で儀礼的な役割を担っている。それは死者が埋葬された後、遺体を運んでいた輿を三回ナイフで刺す役割である。一回刺すごとに彼女は200ルピーから300ルピー受けとることができる。また墓の上で白い布が広げられ、そこに葬儀に参加した人々が5ルピーから10ルピーほどの少額のお金を投げるが、それも彼女の取り分となる。死者が男性だった場合、埋葬して三日後に死者の妻は白いサリーに着がえる。トーツティーは死者の妻が身につけていたターリやバングルなどの装飾品やサリー、米やココナツ、樟脳をウラル (Ural) と呼ばれるすり鉢に入れて混ぜる。その後、三本棒を立ててその上に布をかぶせたテントの下に、混ぜたものを置く。この一連の行為が終わるとトーツティーはサリーなどの衣服を遺族から受けとることができる⁹⁾。

以上のような葬儀の仕事の他に牛が死んだ際にひきとるのもトーツティーの仕事である。上位カーストにとって牛が死ぬことは人が死ぬことと同じ意味になるため、トーツティーの仕事となる。また寺院の祭りやミーティングが行われる際は太鼓を叩いて知らせる。祭りが行われる時には、トーツティーは15日間、三食のうちどれか一食を抜かなければならない。さらには寺院で毎日一時間太鼓を叩く義務がある。ニームという木 (タップの材料にもなる) の枝を縛り、寺院の周りに置いたり掃除したりすることもトーツティーの義務である。また、祭りの山車の飾りつけも行う。このように、ヴァディパッティ町のトーツティーは主に葬儀にかかわる仕事に従事するが、それに加えて以上の様な付随的な仕事も担っているのである。

トーツティーは葬儀で得られる収入の他に報酬をもらう権利がある。収穫が終わるとトーツ

9) チャッキリヤルの女性でトーツティーであるアイヤンマから得られた情報である。



タップ
(現地研究調査時に筆者にて撮影)



タップを叩くチャッキリヤルの男性
(現地研究調査時に筆者にて撮影)

ティーは3マラッカール (Marakkal)¹⁰⁾の作物, または彼らが着ているドーティー¹¹⁾で三回すくった量のお米をもらう権利がある。また、祭りの時期になるとトーツティーに食事を与える習慣もあるという。これらは2013年の時点で確認された。

アルンのあげるパライヤルのもう一つのトリル、太鼓叩きに関して説明しよう。葬儀の場で叩かれる太鼓をタップという。タップとは別名パライと呼ばれる片面太鼓で、二本のパチを使用する。面には牛の皮が使われ、そのことからヒンドゥー的価値観に従ってタップ自体が不浄であるとされる。

タップが葬儀の場で叩かれるのは、まず村中に葬儀が行われていることを知らせるためである。その他に太鼓の音によって故人の霊が家の中に戻るのを防ぎ、他の死者の霊が新たな死者の霊と共に家に入ってこないようにするためであるとされる。また、タップは悪霊を追い払う役割もある。不幸な死をとげた者(子供、事故死、自殺など)は次の世界に行くことができず、村の周辺に留まると考えられている。悪霊は死や血があるところに現れると考えられている。そのため、タップを演奏することで、そういった悪霊を追い払い、人間や神を悪霊から守ることができるとされる [Moffatt 1979: 111-113]。

アルンは葬儀の場におけるパライヤルの役割を積極的に評価し、パライヤルは上位者(上位カー

10) マラッカールとは穀物を量る杓のことである。1マラッカールは約6.5リットルである [関根1995: 要語集7]。

11) 男性の着る腰衣。一枚の布を巻いて着用する。

ストや神)と悪霊の間の仲介者であり、こういったサービスを通じてウールから不浄を取り除く役割があるとす。不可触民が上位カーストによって不浄と結びつけられるのはこのためである。そのために、不可触民はウールから排除される存在となるのだが、しかし同時に彼らはウールの存在を維持するための不可欠な存在となっているのである。

現在ではヴァディパッティ町にはドラムセットがある。リーダー自身がお金をだして楽器を準備し、家に看板を掲げる。依頼があればどの地域にも出かけ、葬式だけではなく結婚式や寺院の祭り、政党の集まりなどで演奏する。報酬はリーダーに支払われ、リーダーがグループのメンバーに分配する。本来は太鼓叩きはバラヤルの伝統的トリルで、村の枠組みの中で特定の社会集団が義務的に行う業務であったが、それが現在では村の枠組みを超えて自由に仕事を請け負い、ドラムセットのリーダーがまるで芸能プロダクションのように演奏者を手配し、業務を引き受ける。そして報酬として金銭を受けとる。このように伝統的なトリルが現在では大きな変容を遂げている。さらに、驚くべきことに筆者が観察したヴァディパッティ町のドラムセットリーダーはチャッキリヤルのみであった。そして実はこれはトーッティーに関しても同様である。すなわち、ヴァディパッティ町のトーッティーは筆者が確認した限りではほとんどがチャッキリヤルであった。このように一見、伝統の単純な継続であるように見える事象にも複雑な事情がひそんでいるのである。インドでカースト制度が根強く存続していると言われるが、大きな枠組みが継続される中でも大きな変化が起こっていることも見逃してはならない。

しかし、これはあくまでも伝統の変容であって消滅ではない。たとえば報酬に関して太鼓叩きの場合、演奏に対する対価として金銭が支払われる。それはまるで近代的な労働に対する報酬のように見える。しかしそれに対してトーッティーの場合、特定の労働に対する金銭の支払いもあるが、収穫期になると一定の穀物を受けとるということも行われている。これはジャジマニ体制における支払い方法に合致しているように見える。このように伝統は変容しながら継続しているのである。

【結論】

カーストと結びついた世襲的職業はインド史の様々な時代の社会・経済・政治的状况に影響されながら様々な変遷を経てきた。アーリア人はヴァルナ制度を創出し、司祭職に就いて自分たちを階層的カースト制度の中で最上位においた。そして他のカーストの人々に自分たちとは異なった仕事を割り当て、その地位を自分たちよりも低いものとして扱った。また低カーストの人たちが騒ぎを起こすことを防ぐために、宗教的な理屈をつけて制度を正当化し、合理化した。やがて世襲的職業が多様化するにともなって、同じ仕事を行う人々は互いに親近感をもち、同一のアイデンティティーをもった集団を形成するようになり、様々なジャティ（カースト）が形成されるようになる。こうして特定の職業を主たる生計手段とする集団が誕生する。その後、経済構造としての世襲的職業はインドの村落においてジャジマニと呼ばれる制度の一環として実践され、これはイギリスがインドに進出するまで続く。ジャジマニ制度は食料供給の単位と考えられている。そこでは職人カーストあるいはサービス・カーストに属する家族は土地所有農業カーストに属する一つないしは複数の家族と結びつけられている。この制度の中で高カーストと低カーストの人々の間には平等や正義といった観念は成立しない。土地所有カーストは経済的・政治的権力を享受する支配者である。分断し支配するという政策をインドでとっていたイギリス政府はインド民衆がカーストに分かれていることを利用し、カーストを固定的な制度にしてしまった。彼らは上位カースト出身者を政府に参加させ、高級職に就任させる一方、低カーストの人々をそこから排除した。しかし現代では世襲的職業

を続ける厳格な規則は存在しない。とはいえ、インドの地方の村落では依然として世襲的職業が継続されている様子が見られる。こうした制度の最大の犠牲となったのが不可触民である。彼らはカースト制度の中で最も底辺的な職業を割り当てられ、様々な拘束を受けわずかな報酬しか与えられなかった。こうした不可触民の中で代表的なサブ・カーストであるパライヤルは、世襲的職業トリルとして太鼓叩きやトーツティーの業務をもっていた。彼らは伝統的にはウールで行われる葬儀の場で太鼓叩きとしてタップを叩き、トーツティーとして葬儀の下働きをしていた。そしてジャジマニ体制のもとでは、その対価として報酬が現物支給されていた。筆者（古澤）が調査した2013年の時点でもヴァディパッティ町では太鼓叩きやトーツティーが存在した。しかし、現在の太鼓叩きがかつてのように義務的職務として太鼓を叩くのではなく依頼された業務を行い、報酬を金銭で受け取っていた。またトーツティーも従来のように葬儀の下働きをするが、葬儀の業務に対して金銭で支払いを受ける。さらに重要なことはこの二つの仕事の担い手がかつてのようにパライヤルではなくチャッキリヤルであることである。このように伝統的なトリルは一見そのまま存続しているように見えて、その実、重要なところで形を変えている。インドのカースト制度を考える時にはこのような持続性と変化の両面、変化の中での継続性と、持続の中での変化の両方を見る必要がある。

参考文献

[日本語文献]

- 井上恭子 2006 「パンチャーヤット」『南アジアを知る事典』辛島昇（編），pp. 579-580，平凡社。
 大橋正明 2001 『「不可触民」と教育：インド・ガンディー主義の農地改革とブイヤーンの人々』明石書店。
 小谷汪之 1994 「不可触民の職務と得分—マハール・ワタンをめぐる紛争と論争」『叢書カースト制度と被差別民 西欧近代との出会い』2，小谷汪之（編），pp. 381-421，明石書店。
 杉本良男 2008 「アーディ・ドラヴィダ」『世界の先住民族 03 ファースト・ピープルの現在 南アジア』綾部恒雄・金基淑（編），pp. 143-155，明石書店。
 関根康正 1995 『ケガレの人類学』東京大学出版会。
 デュボア，J・A 1988 『カーストの民 ヒンドゥーの習俗と儀礼』重松伸司（訳），平凡社。
 山崎元一 2006 「不可触民」『南アジアを知る事典』辛島昇（編），pp. 624-625，平凡社。
 山際素男 2014 『不可触民と現代インド』光文社。
 山下博司・光岡信子 2007 『インドを知る事典』東京堂出版。

[英語文献]

- Arun, Joe C. *Constructing Dalit Identity*. New Delhi: Rawat Publications, 2007.
 Béteille, A. *Caste, Class and Power: Changing Patterns of Stratification in Tanjore Village*. Delhi: Oxford University Press, 1996.
 Bouglé, Célestin. *Essays on the Caste System*. London: Cambridge UP, 1971.
 Delière, Robert. *The World of the 'Untouchables' Paraiyars of Tamil Nadu*. Delhi: Oxford University Press, 1977.
 ———. *The Untouchable of India*. Berg Publishers, 1999
 Dumont, Louis. *Homo Hierarchicus: The Caste System and its Implications*. Chicago and London: The University of Chicago Press, 1980.
 Ghurye, G. S. *Caste and Race in India*. 5th ed. Bombay: Popular Prakashan Private Limited, 2004.
 Gough, Kathleen. "Review on The Hindu Jajmani System: Reviewed Work on A Comparative Analysis of the Jajmani System by Thomas O. Beidelman." *Economic Development and Cultural Change*, vol. 9, no.1 (October 1960): 83-91.

- Accessed August 25, 2020. <http://www.jstor.com/stable/1151925>.
- Knapp, Stephen. *Casteism in India*. Michigan: The World Relief Network, 2016.
- Misra, P. K. "Untouchability in South India." in *The Eastern Anthropologist* 52: 1-12.
- Moffatt, M. *An Untouchable Community in South India: Structure and Consensus*. Princeton University Press, 1979.
- Sekhon, Joti. *Modern India*. Boston: Mc Graw Hill, 2000.
- Smith, Brian K. *Classifying the Universe: The Ancient Indian Varna System and the Origins of Caste*. New York, Oxford: Oxford University Press, 1994.
- Shah, Ghanshyam. *Dalit Movement and the Search for Identity. Dalit Identity and Politics*. Shah, Ghanshyam (ed.) 2001, pp. 195-213.
- Thurston, Edgar. *Caste and Tribes of South India*. 7 vols. Madras: Government Press, 1909.
- Velassery, Sebastian. *Casteism and Human rights: Toward an Ontology of the Social Order*. Singapore: Marshall Cavendish International Private Limited, 2005.